

☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
★幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット News Letter

第70号 2012年6月29日(金)

発行：歴史資料ネットワーク

特集 東日本大震災史料レスキュー活動参加記



▲被災資料と茨城史料ネットのメンバー＝2011年11月19日、添田仁撮影

CONTENTS

- 巻頭言 史料ネットとの出会いから ————— 中岡 宏美 (2)
- 記録資料レスキューボランティア参加記 ————— 富善 一敏 (3)
- 茨城史料ネット被災資料整理ボランティア参加記 ————— 人見佐知子 (6)
- 宮城・岩手での津波被災資料レスキューについて ————— 松下 正和 (8)
- 2012年度歴史資料ネットワーク総会・シンポジウムのご案内 ————— (12)

史料ネットとの出会いから

中岡 宏美

史料ネット設立の契機となった阪神・淡路大震災の発生時、私は6歳でした。当時の記憶はわずかに残るのみ。自宅は大阪東部にありましたが、地震の揺れも覚えていません。

それから約15年。兵庫佐用町に大きな被害をもたらした2009年台風9号豪雨災害における史料レスキューへの参加をきっかけとして、史料ネットの活動に関わるようになりました。この佐用町での体験は、すべてが私に大きな衝撃を与えるものでした。そしてその後、2010年度からは運営委員に名を連ねさせていただくことになりました。しかし就職後は史料ネット活動へ関わることの出来る時間も大きく減り、そのことで思い悩むこともありましたが、自分に出来ることを探しながら進んで来ました。その結果どれほどのことが出来たかわかりませんが、わずかでも貢献出来たのであれば、とりわけ、一人でも多くの方に被災資料保全活動について知っていただく一助となれたならば、嬉しく思います。

私は現在、自治体職員として勤務し、地域の文化財保護に携わっています。そこでは、これまでに史料ネット活動に関わってきたなかで得た多くの出会いと培った経験が、非常に大きな力となっています。ところで、業務においては、国指定から未指定まで、有形・無形、建造物や美術工芸品等々…と、扱うものは様々で、なかには一見資料と思われなようなものもあります。しかしながら、それらやそれらをめぐる人々との関わり合いを通して感じるのは、すべてが、歴史という価値を有するかけがえのない「文化財」であり、様々な想いや努力によって守り伝えられてきた先人からの「贈り物」であるということです。

史料ネットに関わるようになって約3年。その間、奄美豪雨、東日本大震災、2011年台風12号・15号等、各地で大規模な災害が発生し、また今年5月初めには茨城県や栃木県で竜巻による大きな被害がありました。そのような状況下において、今も多くの方々が懸命に被災資料保全の活動に取り組んでおられます。そしてまた、災害時に限ることなく、様々な場所で、様々な立場・分野から、資料を未来へ伝えるための取り組みがなされています。

そのなかで私も、一つでも多くの「文化財」を、少しでも先の未来へ継承するために、日々精励していくつもりです。一人では甚だ微力ですが、たくさんの方々とともに、それらに積み重なった歴史という価値を、さらに積み上げていくことが出来れば…と思います。

最後になりましたが、今年度をもちまして運営委員としての役目を終えさせていただくこととなりました。お世話になりました皆様、ありがとうございました。そして今後ともどうぞ、よろしくお願い申し上げます。

(なかおか・ひろみ／歴史資料ネットワーク運営委員)

記録資料レスキューボランティア参加記

富善 一敏

はじめに

筆者は昨年3月11日に起き、決して忘れることのできない東日本大震災で甚大な損害を被った記録史料（公文書・古文書等の一次資料、アーカイブズ）のレスキュー活動に、ボランティアとして2件参加した。以下の小文ではその概略を紹介し、若干の感想を述べたい。

1. 公文書：岩手県釜石市役所行政文書レスキュー

今回の大震災で発生した津波により、被災地域では広範囲にわたり公文書（行政文書）が被害を受けた。釜石市役所では、段ボール1,000箱（推定2万点）にのぼる書庫内の行政文書が水損被害を被った。国文学研究資料館のチームが救済活動に当たり、現在なお継続中である。詳細については青木睦・西村慎太郎両氏の論考¹を参照されたいが、ここでは筆者が直接携わった救済活動について述べることにする。

東日本大震災から2ヶ月近く経過した4月末以降、文化庁文化財等レスキュー「人間文化研究機構内チーム国文学研究資料館」は、2011年度人間文化研究機構連携研究「大規模災害における資料保存の総合的研究」（研究代表者国文学研究資料館准教授・西村慎太郎氏）の一環として、釜石市役所行政文書のレスキュー活動に当たっていた。釜石市役所第一庁舎の地下書庫で津波の被害を受けた行政文書は、倒壊した書架の簡単な現状記録（写真撮影、簡易スケッチ、内容の簡易把握）の後、簿冊数冊毎にビニール袋に入れられ、地下書庫のすぐ近くの仮置き場に搬入されていた。筆者が参加した2011年6月の段階では、仮置き場から避難所でもある旧釜石第一中学校への搬送と初期乾燥作業が進められていた。

筆者は、東日本大震災後、歴史資料ネットワークや知人を通して、被災地の記録史料が蒙った甚大な被害状況を仄聞してはいた。しかし、職場の復旧作業や日常を取り戻すことに追われ、また東京という被災地からやや離れた地域に居住することもあり、全国歴史資料保存利用連絡協議会の文化財等レスキュー要員リストには登録していたものの、実際の救済活動にはなかなか足が踏み出せずにいた。

5月30日に安藤正人氏（学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻教授）から、6月初旬に行われる釜石市役所での集中救済作業に際し、文化財等レスキュー専門スタッフ募集の案内があった。家族と相談して、6月4～6日の3日間参加することにした。すぐにボランティア保険に加入し、安全靴など装備を整えた。ボランティア活動計画書を職場に提出し有給休暇を取得し、3日夜上野駅前釜石行きの満員の夜行バスに乗り込んだ。

6月4日朝釜石市役所に到着し、簡単な自己紹介の後に搬出班・乾燥班・内容リスト作成班の3班に分かれて作業を開始した。筆者は搬出班であった。簿冊を数冊入れたビニー

¹ 西村慎太郎「災害レスキューから見たこと」『第37回全国歴史資料保存利用連絡協議会全国（群馬）大会』, p.67-72. 2011.10. 青木睦「東日本大震災における津波被害の歴史文化情報資源のレスキュー」『PASSION』33, 2011.11.

ル袋をリヤカーや台車に積み、チーフ林貴史氏（元埼玉県白岡町職員）の指揮の下、数百メートル離れた旧釜石第一中学校校舎の3階及び4階の乾燥場所に搬入する作業を繰り返した。想像以上に身体を使う作業であり、水分補給と十分な休憩を取りながらではあったが、夕方5時までの作業が終わると心底疲れた。国文研スタッフの厚意で近くのビジネスホテルに宿泊することができ、美味しい食事をいただくことができた。翌5日も同様の作業をし、6日午前中に地下書庫内に残る行政文書の現状記録作業を行った後、午後帰京した。なお公文書を取り扱うため、守秘義務に関する誓約書を釜石市へ提出した。



写真1 幟へのサイン

3日間の作業で印象に残ったのは参加メンバーの頑張りである。搬出班は前述の文化財等レスキュー専門スタッフ、山形文化遺産防災ネットワーク、釜石市登録ボランティア（経団連募集の会社員や現地の方など）、国立国会図書館、首都圏の大学やアーカイブズの職員・教員の寄り合い所帯であり、人員は毎日入れ替わり20名ほどであった。朝8時半の全体ミーティングの後、夕方5時まで作業が続く。休憩時間にペットボトルの水を飲みながら色々なことを伺った。朝山形の自宅や花巻の宿泊地から車で来て、夕方には帰るタイトな日程をこなすメンバーたち、各班の作業を無駄なく進行させるチーフ、全体を統括し食事や宿の世話にも当たる指導者青木睦氏のおかげで、集中搬送と初期乾燥の作業が滞りなく進んだ。多くのことを学ばせていただいた

たことに改めて感謝の意を表したい。最終日に「釜石」と大書された幟に日付と自分の姓名を記せたのは（写真1）、未熟な自分にとってささやかな誇りである。

また、被災地へ行って初めて分かることがある。津波の被害の大きさはマスメディア等から承知していたつもりではあったが、その凄まじさは想像を遙かに超えるものだった。釜石市役所のすぐ前の空き地には、大震災から3ヶ月近くたった当時でもなお、ガレキが山積みされていた（写真2）。

帰宅から二三日は、東京が別世界のように身体がフラフラし、夢に倒壊した釜石市街地の目抜き通りの光景が出てくるほどであった。



写真2 釜石市役所前のガレキ

2. 民間資料：茨城史料ネットレスキュー

2011年11月19・20日の両日、茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク準備会（略称茨城史料ネット）の資料レスキュー活動が、資料の一時保管場所である北茨城市華川公民館分館で行われた。茨城史料ネットは2011年7月2日に茨城大学で開催された、茨

城県内の被災資料救出活動に関する緊急集会で設立され、県内の文化財や歴史資料の救済活動に当たっている²。

筆者は7月に茨城史料ネットにも加入した。しかし諸雑事にかまけ幽霊会員の状態が続いていたが、重い腰を上げて参加することにした。11月19日朝9時過ぎ、上野から特急で2時間近くの常磐線磯原駅に到着し、山あいの一時保管場所で作業を始めたのは午前10時、終了は午後4時（作業場所に電気がなく、夕方には暗くなってしまう）であった。2日で実働時間は約10時間、参加人数はのべ40人である。19日は救出した資料の所在地である北茨城市平潟の民宿に泊まったので、翌朝に白井哲哉氏（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科准教授）の案内で、現地の被災状況を垣間見ることができた。20日の朝10時頃には震度5弱の地震があり、一時屋外に避難した。

今回の作業対象は、北茨城市平潟で損壊した土蔵から救出された水産業者の資料であり、文書史料・書籍・民具類からなる（写真3）。白井氏及び茨城史料ネット事務局の山川千博氏から作業手順について詳細な説明を受けた後、3～4人の班に分かれて作業を行った。まず資料収納容器の写真撮影とスケッチ・採寸（専用の現状記録用紙を使用し、箱書きがあれば記録した）を行い、まとめり全体の情報を記録する。記録後ブルーシートに資料を1点毎に並べ写真撮影を行い、専用の資料目録用紙に表題・年代などの必要事項を記入する。また現段階での資料の評価（今後保存するか廃棄するかを判断）を行い、保存を必要としない資料は別置した。文書資料は中性紙封筒に入れ換え、文書保存箱に収納した。2日間の作業で、救出した数十のまとめりの大部分の調査が終了した。



写真3 整理作業前の資料

次に若干の感想を述べたい。アーカイブズ学的段階的史料調査論の立場からは、今回の作業は概要調査（収納容器毎の記録化と資料内容の把握）の段階に当たる。ヒト・カネ・ハコ・時間等多くの制約の中で、妥当な内容であったと感じた。これまで茨城史料ネットにより行われた巡回調査（資料の所在確認）、9月に行われた蔵出し（資料収納状況の記録化と搬出）なしには行えないものであり、関係者の方々、とりわけ地元で多くの労を取られた山川氏の努力に改めて御礼申し上げたい。個人的にはこれまで各地で経験してきた概要調査の作業スキルをそのまま生かすことができ、少しは貢献できたかもしれない。

若干問題を感じたのは、文書資料以外の民具類の扱いである。今回レスキューした資料の今後の保存の見通しが不透明な現在の段階では、保存スペースの問題もあり、ある程度の評価判断をせざるをえなかった。しかし私自身は日本近世史を専門としており、民具類の価値を評価するのは正直言って荷が重い。民俗学の専門家の参加の必要性を痛感した次第である。それでも、今回作成した現状記録写真や資料目録の成果に基づき、行政や地域に適切に働きかけることができれば、状況が変わるかもしれない。事態の推移を見守るためにも、今後とも茨城史料ネットの活動にかかわっていければと感じた。

² 茨城史料ネットの活動に関しては、白井哲哉「茨城史料ネット」の設立と資料救済活動：3・11から7・2へ」『歴史学研究』884, p.30-32. 2011.10、同「茨城における大震災被害と歴史資料の状況」『関東近世史研究』70, p.62-63. 2011.10、白井哲哉・高橋修・山川千博「茨城県内の被災資料救済・保全活動」『日本歴史』762, p.84-90. 2011.11、高橋修・高村恵美・山川千博「茨城県内の文化財・歴史資料の震災被害と救済活動」『歴史評論』740, p.74-85. 2011.12、及び茨城史料ネットホームページ <http://ibarakishiryoku.web.fc2.com/>を参照されたい。

最後に、調査場所やトイレへの送迎、食事の手配など繁雑な事務を担っていただき、暖かく迎えていただいた茨城史料ネットの皆様、旅費の一部援助の労を取っていただいた歴史資料ネットワークの添田仁氏、畏友白井哲哉氏に感謝の意を表したい。

むすびにかえて

以上、東日本大震災で被災した公文書（行政文書）と民間資料の2例について、筆者が経験した史料レスキュー活動について述べてきた。史料の救済活動は、記録史料にかかわるなんらかのスキルがあるのが望ましいが（勿論なくても可）、現地でしか学べないことは必ずあり、できるだけ現地へ行くのが望ましいことを述べて、この拙い参加記の結びとしたい。なぜならそれは、これから数十年のスパンで続く息長い活動であるのだから。

（2012年2月17日記）

（『東京大学経済学部資料室年報』2号（2012年3月pp12-15）を一部修正して転載。）

（とみぜん・かずとし／東京大学大学院経済学研究科学術支援専門職員・経済学部資料室員）

茨城史料ネット

被災資料整理ボランティア参加記

人見佐知子

2012年3月24日、茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク準備会（略称・茨城史料ネット）主催の資料整理にボランティアとして参加した。

この日整理したのは、北茨城市平潟町の〇家文書である。平潟町は江戸時代に、全国の港へ旅客や貨物を運ぶ廻船の寄港地として発展した地域である。〇家は、明治～大正期に魚の仲買商を営んでおり、これまで「文化財」としての調査はなされてこなかった。

平潟町は、茨城県内で最も津波被害の激しい地区のひとつである。しかし、〇家は津波の被害はなく、地震で土蔵が倒壊した。倒壊した土蔵から救出した資料が、今回の資料整理の対象であった。段ボール箱にし



▲資料に番号を付して、写真をとる

＝2012年3月24日、人見撮影



▲目録作成作業＝同

て全部で16箱あり、それらを筑波大学の白井哲哉准教授が引き受けた。20日の第1回資料整理につづく2回目の資料整理がこの日であった。

参加者は、10人。県内外から研究者や市民が集まった。前回からの継続参加者も多く、作業は効率よく順調にすすめられた。整理した資料は、明治後期から大正・昭和にかけての写真（家族写真力）やポストカード（茨城県内の名所などを写す）を多く含んでいた。興味深い資料としては、〇家の女性らによる裁縫関係の資料（和装の手順書、型紙など）が比較的まとまってあった。家業に関係する文書としては、仕入品の書

き上げなどが数点あった。

作業手順は次のとおりである。救出された資料は箱に収納されていて、箱番号がふされている。箱から取り出した資料一点ごとに番号をふし、番号札とともに写真を撮影し、記録とする。その後、箱番号と資料番号にしたがって仮目録を作成する。以上の作業を繰り返し、この日で、〇家文書の整理は終了した（〇家文書は年度内に持ち主に返却の予定）。



▲型紙＝同

資料整理終了後、白井哲哉准教授より「東日本大震災における関東・南東北の被害と歴史資料の救出活動」と題した報告を拝聴した。各地の被災状況を写真で紹介するとともに、北茨城市大津での襖の下張り解体作業、茨城県大洗町の被災公文書の救出作業、新治汲古館（筑西市古郡）の考古資料救出活動、北茨城市平潟町の被災資料救出および整理作業の様子などについて説明があった。

報告でとりわけ印象的だったのは、同じ東日本大震災でも地域ごとに被災の様相が異なるという点である。北関東の地震被害の特徴として、沿岸部の津波被災地域は新興の開発地からなり、旧家の多くは津波の被害から免れたということがあげられる。しかし、旧家のある内陸部に被害がなかったというわけではなく、むしろ地震のゆれによる内陸部の被災は深刻で、多くの家屋が損壊した。このことは、津波被害の甚大さを前に看過されがちで、ほとんど衆目を集めていない。



▲白井哲哉氏による現状報告のようす＝同

今回わたしたちが整理したのは、かかる地域からレスキューされた資料である。史資料レスキューのあり方も地域の歴史的文脈と切り離しては考えられないことを教えられた。（同様に、東日本大震災を「東日本」と一括することの危険性もあらためて認識した）。

東日本大震災からの復興が進む一方で、半壊・一部損壊した旧家の家屋や土蔵の取り壊し、改修工事が進むと、古文書や民具、行政資料など未指定の史資料の廃棄・消失が心配される。そういう意味で、「文化財」

の救済・保全の取り組みは、いまなお、いやまさに「現在進行中」の問題である。また、史資料の救出活動が進めば、史資料の保管場所や整理に携わる人的資源の確保も課題となってくる。とりわけ、福島県以北に比較して、茨城県の地震・津波被害に関する情報は少ない。積極的な情報発信による関心の喚起も重要であろう。実際わたし自身、今回の資料整理への参加と白井報告をうけて、茨城県の被害の（想像以上の）甚大さに驚き、自らの無知を反省することしきりであった。今後とも、微力ではあるが茨城史料ネットの活動に参加し続けることができればと思う。



▲報告スライドから北茨城市の被災した土蔵＝同

（ひとみ・さちこ／甲南大学人間科学研究所博士研究員）

宮城・岩手での

津波被災資料レスキューについて

松下 正和



宮城県農業高等学校資料レスキュー

宮城県農業高等学校は、名取市にある農業高校である。立地は仙台空港の北側の海沿いにあり、津波当日は教職員・学生が屋上に避難し全員助かったという。同校にある創立百周年記念会館 1 階書庫には、近世以来の農業書や、西洋の農業関連の書籍、漢籍など多数の農業関連の図書が収められていた。津波は 1 階部分の鴨居部分まで達し、書籍は水損あるいは流出したという。同校教諭後藤彰信氏らが校内にかりうじて残された書籍類を 2 階にまで移動させ陰干しをしていたという。その後藤氏から宮城資料ネット経由で神戸の史料ネットに連絡が入り、レスキュー要請が正式にあったのは 2011 年 4 月 19 日のことであった。

4 月 25 日にレスキューをおこなう段取りをくみ、宮城資料ネット・山形文化遺産防災ネットワーク（以下「山形ネット」と略）・東北芸術工科大学と連携して、水損資料の搬出と応急処置を行うこととなった。神戸の史料ネットと合わせ計 15 名が救済活動に参加した。

25 日の 14 時に高校に到着し、校長・同窓会長に挨拶した後、早速現場確認と搬出のための分担を決定した。大規模な余震が発生した場合の避難経路を確認した上で、14 時半より、3 班に分かれ搬出作業を開始した。具体的には、①ベランダ部分にて水損史料の泥を刷毛で落とす「ドライクリーニング」班、②ドライクリーニングされた水損史料に付箋をはさみこみ、デジタルカメラによる表題の撮影をおこなう「付箋挟み込み」班、③「テンバコへの移動と搬出」班であった。搬出した水損史料はテンバコにして 50 箱であった。内容は、主に農業関係の和本・洋本である。テンバコは山形ネットと宮城資料ネットのバンに搬入した。17 時に宮城県農業高等学校を出発し、19 時半に東北芸術工科大学に到着し、一晩送風乾燥をおこなった。



▲同窓会館一階部分でのエタノール消毒＝
2011 年 4 月 25 日

翌 4 月 26 日には、東北芸術工科大学にて水損史料の応急処置方針を決定し、和書を水損の状態から①処置不要、②送風乾燥、③水損によりページがくっついて固着展開の必要なもの、④濡れやカビの発生がひどく即冷凍処置すべきもの、の 4 つに史料を区分した。27 日も同様の作業を施した。神戸の史料ネットが関西に戻ったその後も、東北芸術工科大学では引き続き水損史料の乾燥・クリーニング処置を続けていただいた。

創立百周年記念会館 1 階に残されていた書籍やアルバム類が残っているとの情報を得て、5 月 29 日に宮城資料ネットと神戸の史料ネットとで 2 回目のレスキューをおこなった。ただ、東北芸術工科大学では 1 回目のレスキュー史料でパンク寸前であったため、文化財

レスキュー事業に位置づけてもらい、搬出史料を仙台のニチレイの冷凍庫で一時保管していただけるようになった。

13時半に作業を開始し、洋書の表面の白カビをエタノールでぬぐい取ったり、刷毛による泥のドライクリーニングを行った後に、ビニール袋に詰めた水損史料を段ボールに収納した。ただ、冷凍庫に保管するためには、一旦洗浄が必要とのことだったので、水洗いが可能なものと不可能なものを分ける作業をおこなった。15時に搬出し、仙台市立博物館のバックヤードに一旦段ボールを仮置きさせていただいた。翌5月30日に、仙台市立博物館から洗浄場所の向田文化財整理収蔵室に水損史料を移動し、ドライクリーニングと水洗いの作業を並行しておこなった。参加は神戸の史料ネットの他、宮城資料ネット・山形史料ネットであった。その結果、段ボール13箱（計136kg）はニチレイの冷凍庫へ、残りの洗浄不可の史料（アルバムなど）9箱は宮城資料ネットの事務局へと搬出した。向田収蔵室を撤収したのは15時であった。

その後は、東北芸術工科大学を含む山形ネット、宮城資料ネットのボランティアによって、クリーニングが施されることとなった。

なお現在もこれらの資料のクリーニング作業が継続中です。詳しくは山形ネットまでお問い合わせ、ご協力を賜れば幸いです（後述）。

また、宮城県農業高等学校の同窓会より史料ネット宛てに寄附金を頂戴いたしました。頂戴した寄附金は、各地の史料ネットの津波被災資料保全活動のため有効に活用させていただきました。最後になりましたが、お礼申し上げます。



▲向田収蔵室でのクリーニング作業

＝2011年5月30日



陸前高田市立博物館・海と貝のミュージアム収蔵資料レスキュー

陸前高田市海と貝のミュージアムは、約6万種11万点以上という日本有数の貝のコレクションを擁し、陸前高田が生んだ博物学者鳥羽源蔵や千葉蘭児採集品を中心に、新種や新称の貝の模式標本なども数多く所蔵するミュージアムであった。しかし、今回の津波により躯体・外壁は残っているが内壁は多くが剥がれ、展示設備は1階・2階とも壊滅的被害を受けたという（saveMLAKの情報より）。



▲海と貝のミュージアム＝2011年5月10日、車中より撮影

害を受けたという（saveMLAKの情報より）。

2011年5月3日、岡山理科大の富岡直人氏経由で、同ミュージアム学芸員の熊谷賢氏から、鳥羽源蔵の収蔵していた古書類や標本類（昆虫他）が潮をかぶったが、雑事の対応が忙しく、未だに手が回らず作業ができない状況である、また翌週には、東北芸術工科大学が復旧の援助に来るとのことだが、鳥羽所蔵古書（人類学雑誌や貝類学雑誌など）については対応案がないようで、熊谷氏が苦慮されているとの連絡を受けた。明治時代の洋書タイプの古書が潮に浸かった場合の対処法について、富

岡氏が岡山大学の今津勝紀氏に相談をし、今津氏経由で松下宛にその被災情報がもたらされた。

そこで、松下は3日に富岡氏と、4日に熊谷氏と直接連絡をとって、ライフラインが復旧していない中では置きっぱなしでもやむを得ないが、せめてメッシュコンテナに詰め替えることができないか、空気容量の大きい部屋に移動できないか、扇風機で送風乾燥ができないか、などを問い合わせた。しかし、通常のテンバコしかなく、扇風機も富岡氏が持参した1台だけが乾燥の機材だとのこと、週明けには県博の支援もあるとのことだったので、必要があるなら神戸から物資を送るとだけお伝えし、さしあたり岩手県の対応に一任することとした。6日に富岡氏より連絡を受けた岩手県教育委員会佐藤嘉広氏から、東北芸術工科大学グループが史料レスキューをおこなうので合流して欲しい、との連絡が松下にあった。松下は、7日に芸工大の米村祥央氏に連絡をとり、神戸の史料ネット・山形ネットと共同で10日朝からレスキューをすることが決定した。

神戸の史料ネットからは計3名、山形ネットメンバーからは2名が参加した。午前4時半に山形蔵王ICで合流、途中長者原SAで芸工大メンバー2名と合流し、陸前高田市へと向かった。水損資料は海と貝のミュージアム所蔵資料ということだったので、初めは同館を目指し午前9時に到着した。しかし、結局資料自体は同館ではなく、次いで陸前高田市立博物館へと向かった。9時15分に同館にて芸工大出身者で写真家の永幡嘉之氏と合流し、氏から資料は自衛隊によって一時保管場所である廃校になった生出小学校へと搬出されているとの情報を得て、自衛隊車両（第9師団）の先導によって旧生出小学校へと向かった（なお、自衛隊が同校に搬入したのは市立博物館所蔵の資料）。到着したのは午前10時であった。

まずは、自衛隊が搬送した市立博物館所蔵分の水損資料を生出小学校の二階部分へと搬入した。神戸・山形ネットメンバーもその作業を手伝った。



▲自衛隊と共に被災資料を搬入＝
2011年5月10日撮影

その後、生出小学校で自然乾燥中だった海と貝のミュージアム所蔵鳥羽源蔵関連資料の搬出に移った。搬出した資料は、1階と2階の教室に置かれていた鳥羽源蔵関連資料が収められた段ボール箱、植物標本を挟んでいた古新聞などであった。また、一本来県博に運ぶべきだった資料が誤って生出小学校に搬入された学校日誌や村絵図（いずれも市立博物館所蔵）が玄関先に置かれていたため、こちらの分も同時に搬出することとなった。搬出した量は正確にはわからないが、山形ネットが用意したバンと芸工大が用意したトラックが一杯になるくらい積み込み、芸工大へと移送した。私たち神戸ネットのメンバーは、帰りの飛行機の時間が迫っていたため、芸工大へは向かわず、生出小学校にて解散した。

翌5月11日に、芸工大にて仕分け作業がおこなわれ、12日に山形県内の冷凍倉庫（芸工大が用意）に移送するとの連絡を芸工大の米村氏より頂戴した。分量は段ボール箱約40箱とのことであった。

芸工大の受け入れ容量がパンク寸前だったため、2回目以降のレスキューは文化財レスキュー事業に位置づけていただいた。5月25日の5時に山形蔵王ICで山形ネットメンバーと合流し、一関ICを下りて生出小学校へ向かった。8時半に到着し、9時より岩手ネットメンバー、北上市教育委員会などと合流し、玄関前にて洗浄方法・ビニール袋詰めなどの作業方針を説明した。松下は、現場で史料の状態に応じて「トリアージ」をおこない、

①「乾燥がほぼ済んでいる、泥や海水による汚損が少ない、臭いがあまりないもの」、②「泥や海水による汚損が激しく、臭いもあるもの」、③「ペン書き、色つき罫紙の使用など水洗いにより色落ちのおそれがあるもの」の三つに分けて、参加者に作業をしていただいた。②については、史料洗浄を行い簡単に吸水乾燥処置を施したあと、ビニール袋詰め



▲屋外でのクリーニング作業＝2011年5月
24日撮影

をおこなった。①、③についても段ボール箱を分けてエタノールで殺菌した後に、ビニール袋詰めをおこなった。13時半、段ボール箱20箱（計315kg）を詰め終えた。なお、この中には、指定文化財の吉田家文書3箱を含んでいる。16時に山形ネットメンバーは仙台のニチレイに水損史料入の段ボール箱を搬入した。

その後は、東北芸術工科大学を含む山形ネットのボランティアによって、クリーニングが施されることとなった。

以上、史料ネットが震災直後におこなったレスキュー活動と山形・宮城・岩手への後方支援の様子を報告した。レスキューされた津波被災資料のクリーニングはまだ山形県内で現在も継続中である。山形ネットでのボランティアの問い合わせについては、下記山形ネットブログ・メールまでお願いいたします。

山形ネット山形文化遺産防災ネットワーク（略称「山形ネット」）

連絡先：小林貴宏（同ネット代表事務局）

事務局メール：DQB00442@nifty.com（小林）

ブログ：http://yamagatabunkaisan.cocolog-nifty.com/blog/

（まつした・まさかず／歴史資料ネットワーク副代表）

史料ネット NEWS LETTER No.70 2012年6月29日発行

編集・発行 歴史資料ネットワーク

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学文学部内 史料ネット

TEL&FAX:078-803-5565（開室時間 平日の午後1時～5時）

e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp

被災史料救出活動のようす・詳細は日々ブログに更新しています。

http://blogs.yahoo.co.jp/siryo_net

歴史遺産と資料を守りぬく

—関西と知られざる大震災の現場を結ぶ—

昨年発生した大震災の被災地では、1年以上が経過した現在でも、歴史資料や文化財を救う活動が続けられています。

一方、私たちの関西では地域社会の縮小や「改革」の中で、地域遺産を取り巻く厳しい状況がある中で、それらを未来へと伝えようとする取り組みが行われています。

大震災後に保全活動が始められた茨城や長野での取り組みの成果と教訓に学びつつ、私たちがこれから歴史遺産を守り、いかに未来へと伝えられるか、みなさまと共に考える場としたいと思います。

◆報告

- ・白井哲哉氏（茨城歴史資料・文化財救済・保全ネットワーク準備会）
- ・白水 智氏（地域史料保全有志の会〈長野県栄村〉）
- ・尾崎安啓氏（寝屋川市立中央図書館）

◆日時：7月8日（日）

総会：10:00～12:00

シンポジウム：13:00～17:00

◆会場：

神戸大学

梅田インテリジェントラボラトリ

大阪市北区鶴野町 梅田ゲートタワー八階

阪急梅田駅 東へ徒歩3分

JR大阪駅 東へ徒歩7分

※右の地図をご参照ください

◆資料代：500円

